

一九三八年から一九四三年まで『旅と伝説』及び『民間伝承』に見える太田の投稿、通信及びその紹介、後記やその他太田と関連する内容は表11を参照されたい。

太田は雑誌への投稿以外に、展示会に写真を出品するなど、積極的に中国研究の成果を示していた。一九三九年十月、関西学院大学創立五〇周年の記念活動の一つとして、年中行事・民間信仰・民俗芸術（子供の世界）・民具及び生活・郷土資料など五つの展示室からなる日本最初の民俗展覧会が行われ、各地郷土研究会から機関誌や刊行物が寄贈され、近畿とくに兵庫を主として、岐阜、徳島、新潟や東京からの出品があった。目を引くのは、当時中国にいた橋文策⁶⁸と太田からも出品があったことである。郷土資料という展示室に、国内外の出土品、日本民俗学の発達を語る文献、地方郷土研究雑誌、方言分布図、日本と世界の頭上運搬・父親分娩習俗分布図や柳田の著作書と並んで、「中支戦線の太田陸郎氏の、写真出品あり、中支の民俗と、日本の相似を理解することが出来た」⁶⁹と報告されている。

3 太田陸郎の中国経験と日本民俗学

太田陸郎は、大学出身のエリート知識人であり、また郷里の生活の細心な観察者であり、郷土史料の熱心な蒐集者でもあった。一九二〇年代後半、彼は早くから民謡や方言など民俗学的な事象に関心を持ち、しばしば新聞雑誌などに投稿した。兵庫県庁勤務の傍ら、三〇年代前半で、彼は地元の神戸で兵庫県民俗研究会を組織し、良質な地方民俗雑誌『兵庫県民俗資料』の編集に精力的に取り組み、郷土史関係の古い資料を多数復刻して解題をつけ、また多くの論文、報告を発表し、貴重な民俗資料を残した。

一九三〇年半ばから、柳田を中心とする日本民俗学の組織化の過程に積極的に参与した太田は、『近畿民俗』の編集に携わる傍ら、民俗講習会や例会など近畿地方の民俗学会の活動にも取り組み、日本民俗学の地方組織者とし

ての役割を果たした。そこで太田は、その視野を郷土の西播、兵庫県から次第に日本に広げ、文献史料より調査を重視する方向に研究の重点を移し、さらにそれまでの研究の整理総合にも手を付け始めた。

日中戦争の拡大によって、軍曹として召集された太田は、自分にとってまったく新しい中国の土地に踏み入り、長期滞在を余儀なくされた。しかし彼はむしろ最初からそれを良い機会として受け止めているかのように、行き先の土地を民俗学的な視線で観察し、その成果を積極的に日本の学界に向けて発信し続けていた。太田は自分の中国研究を日本研究の延長線上に位置づけており、そこには強い文化史的な関心がみられ、かつて兵庫県で地域の文化史を究明すべく活躍していた太田の姿と重なることが多い。

軍人という身分や言語の障壁などの問題で彼の中国経験は限定されたものとなったが、日本での経験との比較と中国文化への沈潜によって、日本を改めて認識する可能性を獲得した。彼の中国研究は、当時既に一人の軍曹による道楽的な研究ではなく、「日本民俗学の最も忠実なる学徒の一人」⁽⁷⁰⁾によるものと理解されており、整備されつつあった日本民俗学の研究の一部として評価されている。

「太田陸郎君は中支の或小さな守備部隊の長になって、飽きるほど一つの土地に滞陣し、其間に実に熱心な観察をして居る。この人のやうに細かに故郷の生活を知つた上で、更に向ふの農民の実情を、理解しようとした人も稀なのである」と柳田国男が最大の賛辞を送る背景に「沢山の通信を私たちの処へも送つて来て居るが、ただ雑誌に公表した一小部分のみが、遺稿となつた」⁽⁷¹⁾という事実があった。

こうしてみると、日本民俗学にとって太田陸郎の役割は中国の「現地レポーター」に譬えられよう。太田が軍務の傍らで書いた文章そのものは研究のためのノート、ヒント集という性格が強く、今日では研究と見なされない可能性がある。しかし彼は「熱心な観察」をし、そのときどきの様子、自分の感想を含め、通信、寄稿あるいは民俗展示会への写真出品などの形で、積極的に日本民俗学界に向けて発信し続けていた。彼はその先駆者であると同時に、また最も積極的な人物であり、こうした彼の活動はよく取り上げられ、多大な注目を集めていた。たとえば、

南方熊楠の絶筆の一つは、太田の文章に呼応しての「太田君の進軍中に見る支那習俗（二）を読む」であった。この未完成の原稿は、南方の弟子雑賀貞次郎によって発見され、遺稿として『旅と伝説』一七一〇（一九四二年十月）に掲載されたが、柳田は『支那習俗』の序文でも太田に対する南方の高い評価にふれている。太田陸郎と国内の日本民俗学の間の交流は、『民間伝承』『旅と伝説』だけでも表11のように、その数は驚異的なものであった。こうした密接なレポートとコメントが、いつも目にふれやすい形で展開されていた。中国において日本人研究者による民俗学の研究が、時代の要請であると同時にまた実行可能なことでもあるというイメージを日本民俗学に与えた存在として、太田陸郎が果たした役割は大きいと言えよう。